

東南アジアのイスラーム知識伝達におけるアラブ系移民の役割 —海を越える系譜と師弟関係—

塩崎(久志本) 裕子

マレーシア国際イスラーム大学

緒 言

本研究の目的は、東南アジア（特にマレーシア、インドネシア、シンガポール）とアラブ地域（特にメッカ、イエメン、エジプト）をつなぐイスラーム知識の伝達において、東南アジアに住むアラブ系移民（特に預言者の子孫）が歴史的にどのような役割を果たしてきたのかを明らかにすることである。イスラームの預言者ムハンマドの子孫は世界各地に存在し、インド洋周辺や北アフリカ等のムスリム社会で大きな影響力を持っている。各地をつなぐサイイドの系譜や、各地のサイイドに対する崇敬のあり方は、歴史学、人類学研究の対象とされてきた（例えばHo, 2006）¹⁾。東南アジアについても、Freitag and Clarence-Smith (eds.) (1997)²⁾や新井和宏による一連の研究³⁾などがあるが、特に各地における宗教的役割について、非アラブの宗教指導者との関わりを含めて論じた研究はほとんどない。

そこで、本研究では東南アジア（以下、マレー語を主な媒介語としてイスラーム知識を共有した地域として「マレー世界」の語を用いる）と中東をつなぐイスラーム知識のネットワークの中で、サイイドの血縁の系譜と、サイイド以外の宗教知識人を含む師弟関係のネットワークがどのように交わり、東南アジアのイスラームが形成されているのかを明らかにすることを目指した。このようなネットワークの形成は13世紀ごろから徐々に発展した歴史的過程であり、また地理的にも中東とマレー世界のみならず、インド、アフリカ、さらに欧米といった広い地域を含む現象であるため、本研究では特に歴史と現代における二つの現象を具体的事例として調査を実施した。その一つは、現代のマレーシア、インドネシアにおけるサイイドの宗教的役割の再評価という現在進行形の現象についてのフィールドワークを中心とする調査、もう一つは17世紀アチェで活躍し、マレー世界におけるイスラーム知識の形成に大きな役割を果たしたサイイド知識人であるヌルディン・アル＝ラニーリーに關

する写本の読解を中心とする文献調査である。

調 査

2015年7月から2016年6月にかけてクアラルンプール、マラッカ、ジョホールの各地でフィールド調査および資料収集を行った。また、2015年8月にはインドネシアのスマランで調査を実施した。まず、現代のサイイドの再評価について、2005年頃からマレーシア、インドネシア、シンガポールで目立つようになった「サラワート集会」において参与観察を行い、関係者にインタビューを実施した。「サラワート集会」の語は筆者の造語であるが、近年特に都市部で急増しているイスラーム的集会で、主に預言者ムハンマドをほめたたえる詩の朗誦や歌を通じて、信仰心の強化や神からの恩恵に与ろうとするものを総称するものとして使用している。これらの集会は、マレー世界で伝統的に実践されてきた類似の儀礼が新たな

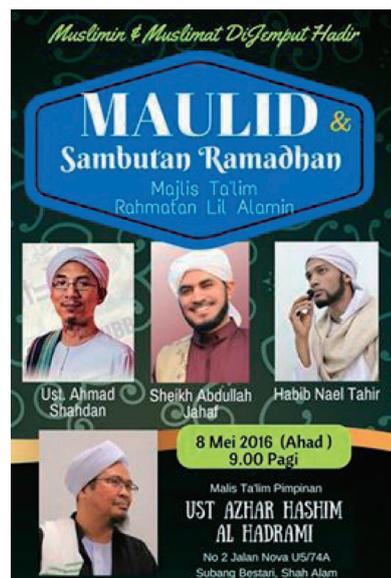


写真 サラワート集会のポスター。白いターバンと、肩にかけた布がサイイドもしくはその弟子としてのアイデンティティを象徴している

要素を伴って再生されたものということができるが、サイドのイスラーム知識人が儀礼の主催者として目立った役割を果たしているのが特徴である。だが同時に、これらの集会はサイドのみならず、非サイドのマレー人、インドネシア人知識人等が企画、実施等において重要な役割を果たしている（写真）。集会ではしばしばイエメンやエジプト、東南アジア各国からのゲストも招かれており、これらのイベントの主催者、参加者の相互の関係が形成されたプロセスをインタビュー等から明らかにすることで、サイドと非サイドの交わりの中で形成されるイスラーム知識伝達のネットワークの現状を見ることができる。第二のアル＝ラニーリーは、インド出身のサイドでアチェの王宮において宗教の最高権威に任命され、マレー語の著作を多数執筆してマレー世界のイスラーム知識の形成に貢献した人物である。アル＝ラニーリーの多数の著作のうち、『来世の知らせ』という著作を取り上げ、その記述の内容をマレー世界で広く流通している類似内容の著作と比較した。

結 果

サラワート集会を通じたサイドの役割の再認識については、調査期間を通じて東南アジア・ムスリム社会へのさらなる浸透が見られた。例えば、マレーシアではサラワート集会の指導者として有名になったインドネシア出身のサイドであるハビブ・アリー・ザイナル・アビディン（「ハビブ」はサイドのイスラーム知識人に対する敬称）がイスラーム系有料放送でレギュラー番組を持ち全国的に知られるようになったり、サイドと親しい非サイドのマレーシア人イスラーム知識人が独自の小規模集会を定期開催するものが増加するといった現象が見られた。マレーシアとインドネシアにおけるこれらの集会の主催者のほとんどが、二人のイスラーム知識人のどちらか、あるいは双方につながりをもっていることがわかった。一人はメッカでハディース等を教えていたサイド・ムハンマド・アルウィー・アル＝マーリキー（2004年没）、もう一人はイエメンのハドラマウトで宗教学校を主宰しているサイド・ウマル・ハフィーズである。特にインドネシア・シンガポール・マレーシアにおけるサラワート集会の普及においては、いずれもサイド・ウマル・ハフィーズの弟子たちが、ハドラマウトにおいて広く行われている集会の様式に、マレー世界の人々の嗜好に合わせて預言者をたたえる歌にマレー式のタンバリンの伴奏をつけるなどアレンジを施したこ

とで人々の関心を引き付け、インドネシアでは10万人規模、マレーシアでも2万人規模の集会をも可能にした。上述のハビブ・アリーは、マレーシアにおけるサラワート集会普及に貢献した中心人物の一人であるが、ハビブ・ウマルの宗教学校の第一期生である。

これらの集会を通じて、マレーシア、インドネシアの非サイドのムスリムの間で、サイドのイスラーム知識人の知名度が上がり、集会への一時的参加のみではなく毎週モスクや自宅でイスラーム学習を開催するなどの形で彼らに師事したり、子弟をイエメンやインドネシアのサイドが主宰する宗教学校へ送る動きが現れた。こうしてサイドに師事した非サイドや、従来は「サイド」としてのアイデンティティを強く示すことはなかったサイドの若い世代が「サイド」とのつながりを前面に出した独自の集会や学習会を開くようになり、ネットワークのさらなる拡大が進行しているのである。

アル＝ラニーリーの著作については、終末の訪れと来世についての説明の時間軸、強調点の置き方等についてマレーシア、インドネシア、タイ南部、フィリピン南部の各地で流通している六点の著作と内容を比較した結果、おおくの共通性が見いだされた。特に重要なのは、うち四点に、来世に関する説明に先立って、各著作の冒頭が宇宙の創造の過程に関する説明で始まっているという共通点が見られることである。この創造の過程は「預言者の光（ヌール・ムハンマド）」と呼ばれる概念を用いて説明されているが、この概念はマレー世界のイスラーム古典において非常に親しまれている一方で、存在一性論との関連が強くイスラーム教義からの逸脱であるという論争が絶えないものである。アル＝ラニーリーは、ラニーリーがアチェに到着した当時アチェで広まっていた存在一性論を否定し、イスラーム法の遵守を主張したことで知られているが、そのラニーリーの著作が預言者の光の記述で始まっていることは非常に興味深い。ラニーリーの著作自体の影響力を測定することは困難であるが、このような特徴的な議論が他の著書にも共有されていることから、ラニーリーの著作に見られる死生観は、マレー世界における主要なディスコースであるということではできよう。このラニーリーの著作に関する分析ではさらに、預言者などによる死後の「とりなし」に関する概念を他の著作と比較し、マレー世界における聖者崇敬の形成におけるサイドの役割を検討する布石とした。

ま と め

本研究では、サイドと非サイドの関わり合いの中で東南アジアのイスラーム知識伝達がどのように形成されているのか、という広い関心の中から、近年のサラワート集会と、17世紀アチェのサイド知識人という二つの点を取り上げて事例研究を行った。現代と17世紀というポイントはかけ離れているように見えるが、近年のサイドの役割の再認識の素地には、マレー世界において親しまれてきた様々なイスラームのディスコースがある。本研究で扱ったアル＝ラニーリーの死生観は、そうしたディスコースの一つであった。このようなマレー世界のイスラーム世界の素地の形成にサイドがどのようにかかわってきたのか、特に中世イスラーム神学および神秘主義の代表的学者であるアル＝ガザーリーの影響の広がりとの関わりについて研究を進めることで、現在のサイドの再認識の現象がどのようにして起こったのかについて理解を深め、さらには東南アジアのイスラームの形成におけるサイドの役割の全体像へと考察をすすめることができよう。

なお、以上の研究成果は、助成期間中に下の論文および国際会議にて発表した。

“The Day of Judgement in al-Raniri’s Akhbar Akhira: A Preliminary Discussion for Comparative Analysis,” (Sugahara ed.) pp. 75–96, Institute of Asian Cultures-Center for Islamic Studies, Sophia University, 2016.

“Changing Role of Hadrami Sayyids in the transmission of Islamic knowledge in Malaysia,” International

Conference on Southeast Asia (ICONSEA 2015), University Malaya, 2015年12月

“Description of the Day of Judgement and the Prophet’s Intercession in Malay Manuscripts: al-Raniri’s Akhbar Akhira and Related Texts,” The Fourth International Workshop on Comparative Study of Southeast Asian Kitabs. 上智大学, 2015年10月.

謝 辞

本研究は、公益財団法人三島海雲記念財団平成27年度学術研究奨励金の助成により実施されました。マレーシア・インドネシア調査においては、スルタン・アゴン大学（スマラン）およびサラワート集会の関係者の協力をいただきました。また、ラニーリー写本に関する研究成果の発表においては、上智大学イスラーム地域研究センターの支援を得ました。調査の実施を可能にくださった関係者の方々に、心より感謝いたします。

文 献

- 1) E. Ho: *The Graves of Tarim: Genealogy and Mobility across the Indian Ocean*, University of California Press, 2006.
- 2) U. Freitag, W. Clarence-Smith (eds.): *Hadrami Traders, Scholars, and Statesmen in the Indian Ocean, 1750s–1950s*. 1997.
- 3) 新井和広：東南アジアから南アラビアへの留学 ハドラマウト地方の宗教学校，ダール・アル＝ムスタファー（預言者の家）の活動（床呂郁哉編），pp. 51–73, 東京外国語大学出版会，2012.